



## 早穫りマルチ（土寄せ）栽培における ニンニク白絹病の防除対策の検討

香川県農業試験場 片山 貴博<sup>かたやま たかひろ</sup>・西村 文宏<sup>にしむら ふみひろ</sup>\*・佐野 有季子<sup>さの ゆきこ</sup>\*\*

### はじめに

香川県では県下全域でニンニク (*Allium sativum* L.) が栽培されており、作付面積は98 ha、収穫量は649 t (農林水産省統計, 2023) の全国第3位である。

本県におけるニンニクの作型は、10月上旬に平畝に定植を行い、発芽後に複数回(3回程度)計10 cm 土寄せを行った後、12月上旬に地温確保を目的として透明または緑色マルチを被覆して芽出しを行う①早穫りマルチ栽培、土寄せ後のマルチ被覆を行わない②普通栽培、抑草および省力化を目的として畝立て・黒マルチ被覆後の10月上旬に定植を行う③先マルチ栽培の大きく3作型あり、すべての作型において *Sclerotium rolfsii* による白絹病が発生し収量低下の一因となっている。

いずれの作型においても、本菌は主に収穫前である4月以降に発生し、ニンニクの地下部および地際部に白

色の絹糸状の菌糸を張り巡らせ、やがてナタネ種子大ほどの菌核を形成する(図-1)。本病害に罹病したニンニクは、菌糸および菌核が出荷部位に付着するため商品価値を失う。しかし、ニンニクにおいて本病に登録のある農薬は試験を開始した2019年ではシメコナゾール粒剤の土寄せ時2回処理に限られ、土寄せ時の薬剤処理を行ったにもかかわらず防除効果が十分ではない圃場が散見された。そこで、本菌に対する有効薬剤の選定と、菌核の発芽温度から推測した感染時期に基づいた薬剤処理時期の検討を行った。

本県のニンニク栽培において半数以上を占める①早穫りマルチ栽培では(図-2)、3月下旬ごろから摘蕾を行い、4月中旬から5月中旬にかけて収穫を行う。同作型は、先に挙げた3作型のうち、地温が最も高く、本病害が多発する可能性が高いため、以下の防除試験はすべて①早穫りマルチ栽培で行った。



図-1 ニンニク白絹病の標徴  
左図矢印：菌糸、右図矢印：菌核。

Study on Control Measures for Southern Blight in Mulching Cultivation of Garlic. By Takahiro KATAYAMA, Fumihiko NISHIMURA and Yukiko SANO

(キーワード：ニンニク、白絹病、インピルフルキサム水和剤、土寄せ栽培)

\*現所属：香川県農政水産部農業経営課

\*\*現所属：香川県東讃農業改良普及センター